

INTERVIEW

KENYA

アフリカと開発援助への関心から現地へ。スワヒリ語を習得し、開設間際の NGO へ就職

中村香子さん <アジア医師連絡協議会ナイロビオフィス勤務> Secretary General, AMDA International Nairobi



スワヒリ語を話せる外国人は珍しいため、皆フレンドリーに接してくれるのがうれしい

略歴 1965年生まれ。津田塾大学文学部英文学科卒。日本 IBM に入社しシステムエンジニアとして約6年間働く。92年、以前から興味を持っていたアフリカに初めて旅行しケニアにも足を延ばす。以来、アフリカの魅力とともに開発援助や国際協力に関心を向けはじめ、93年ナイロビのスワヒリ語学校に入学。94年11月に現在勤務する NGO の AMDA がナイロビオフィスを開設すると知って応募、採用。

準備資金 150万円の貯金を持参。

収入 基本給が月に700ドルで、これに手当がつく。ケニアではぜひたくをしなければ暮らしていける金額。

住まい ワンルームのアパート。広さは40平方メートル。家賃は月額およそ400ドル。スペースのわりに高額だが、セキュリティサービスがついているので安心。オフィスまではマタウ（小型バス）で約15分。

休日休暇 ケニアのカレンダーに合わせて休む。市内のマーケットを散策するほか、ストリートチルドレンの職業訓練を行う英国人女性の手伝いをしたり。半年に1度、1週間の休暇には国内をバスで旅行する。

アフリカへの憧れと開発援助への問題意識

アフリカには昔から興味があった。1992年に初めてケニアを旅行しました。以来、ますますあこがれが募ると同時に、国際協力や開発援助といった分野へ関心を持つようになりました。ODA に関する新聞報道などを見ると、税金の無駄使い、環境破壊、現地の事情の無理解といった問題点の指摘ばかりが目につきました。

そこで、とにかく自分の目で実態を見たいと考え、翌年ナイロビにあるスワヒリ語の学校（ケニア・スワヒリ語学院、P.226参照）に入学しました。ここでは語学のみならず、政治経済や民族文化などさまざまな講義もあり、いいオリエンテーションでしたね。

ナイロビには欧米各国からの NGO も多く、どんな活動をしているのか知りたいと思うようになりました。そんな矢先、AMDA（アジア医師連絡協議会）がナイロビオフィスの新設にあたって日本人スタッフを探していることを知りました。試しに門をたたいたとこ

ろ幸運にも採用され、94年11月から事務局長として業務の切り盛りをすることになりました。

AMDA は、阪神大震災で広く知られるようになりましたが、84年に日本、インド、タイの医師が中心になって設立したもので、アジア各国の医師が内戦や災害時の救援における相互協力を行うことを目的としています。

私の仕事は大別してふたつで、アフリカ5カ国で行っているプロジェクトの運営面でのサポートと、ケニア国内における医療プロジェクトの掘り起こし、実施可能性調査（ワイジビリティスタディ）、プロポーザル（提案書）作成など。

ケニア政府との交渉や NGO 他団体との意見交換、必要に応じて UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）ナイロビオフィスとのやりとりを行うほか、スタッフの航空券の手配や物品の発注など、業務の幅は広いです。

第三世界にしかないエネルギーを感じつつ

よくいわれることですが、ケニア政府の腐敗はひどく、援助慣れして、すれていますから、NGO、ましてや日本人スタッフともなればいい力毛で、露骨にチャイ（賄賂）を要求されたり……。誰をどこまで信じていいのかわからず当惑したこともしばしば。とりわけ着任後9カ月はひとりでしたので不安でしたが、現在では日本人男性とケニア人秘書が加わり、ずいぶんやりやすくなりました。

スワヒリ語がしゃべれる外国人は珍しいせい、しかも面の役人

が急にフレンドリーになったり、視察先の地元の人々としか話ができるなど、仕事面でもはじめに言語を習得したメリットはあります。プライベートではスワヒリ語で通しており、生活の幅が広がるのを感じています。

ケニアは多くの部族が個性豊かに国を彩っていて、民族音楽、衣装、習慣などに興味のある人にとってはたまらなく魅力的でしょう。大都会ナイロビにはアフリカ全土のアーティストが集まっており、高価な土産物屋は博物館のようです。

また、各種学校から劇場、映画館、各国料理のレストラン、クリニング屋から貸しビデオショップまで何でもありです。野菜や果物は素材自体がおいしく種類も豊富。時折日本酒が夢に出てくるぐらいで（笑）、何の不自由も感じません。

セキュリティ面で常に緊張感には保っていますが、貨幣価値の異なる国で暮らす代償だと思っています。第三世界には第三世界にしかないエネルギーというものがあり、そこに身を置いて暮らすのはとても刺激的です。

将来については、開発プロジェクトのコーディネーターとして専門家と呼べる人が日本にはほとんどいないこともあり、今後どういう方向に自分が成長すべきかがまだよく見えていません。焦る気持ちはありませんが、スワヒリ語の「ボレボレ（のんびり、ゆつくり）」のように、ここでは焦ることも体がばかばかしい気もして、「納得いく道を気長に探そう」と、つい楽観的になるのも事実です。